

# 企業者活動供給の原基

—— 総合商社のルーツ ——

瀬 岡 誠

## I はじめに

東亜同文書院の前身とも原型ともいわれる日清貿易研究所は明治23年に、荒尾精が、盟友根津一や花田仲之助の協力を得て、上海に設立したユニークな教育機関である。それは日清戦争勃発により、わずか数年で閉鎖されるにいたる。しかし、明治17年に末広重恭を館長に設立されるが1年足らずで閉鎖された東洋学館とともに、のちの東亜同文書院の設立と発展に与えた影響には決定的なものがあつた。もちろん後述する如く多くの注目すべき人材を輩出した。

ところで大森史子氏は、研究所の「教科」と「教職員」に言及したい、  
「教科は東洋学館同様、中国語、英語、中国事情などで、教職員のほとんどが漢口樂善堂同人であつたところから、経済人教養機関<sup>37</sup>というよりは、荒尾集團の再生・増産機関<sup>1)</sup>といった方がよいだろう」と記している。しかしこれは、私見では、研究所の実情を伝えるには少々説明不足である。

日清貿易研究所は、当然のことながら、創立者荒尾精や協力者根津一などを中心とするグループの理念の実現に貢献する人材を育てることを目的として設立され、運営されたのであるが、その理念自体のなかに、研究所を「企業者の供給源」(*the source of entrepreneurial supply*)として機能させようとする意味の言葉が明確に打ち込まれていた。即ち、大森史子氏も記してい

1) 大森史子「東亜同文会と東亜同文書院」(『アジア経済』第19巻第6号、1978年6月) 85頁。なお本稿は同稿より大きな示唆を受けた。

るように、日清貿易研究所は、荒尾が3年にわたる中国滞在により到達した結論のひとつが現実化されたものであった。そしてその結論とは、「まず日清の融和提携を計り、両国の貿易を振興して、東洋をして富強ならしめる」ためには「日清貿易振興の適当なる機関と、それに従事すべき有為の人材を養成することが最も緊急事である」というところにあった<sup>3)</sup>。

そこで本稿では、日清貿易研究所が果たしていくつかの機能のうちで、主として「企業者の供給源」という機能に焦点を当て、それが企業者史的なパースペクティブにおいてどのような意義を有しうるかを、できるかぎり明らかにしたい。

なお荒尾精は当初は「日清貿易商会」という一大商社の設立を企画し、これを「対清貿易振興」の一大契機とするために大いに奔走した。しかしこれは当時としては余りにも遠大にして逸脱的な考えであったために無視されてしまった<sup>4)</sup>。ところがこの「商会」の下部組織（付設機関）として企画されていた「日清貿易研究所」の方は、資金調達の目処がついたのである。（政府補助金については、後述する如く、色々トラブルが発生したが。）

ところで本稿においても十四会系準拠集団と本稿の直接の分析対象である諸集団や諸組織との相互作用や絡み合いのプロセスが執拗に叙述されよう。それは本稿の究極的な目的が、日清貿易研究所の設立と発展にコミットした人々や集団の企業者史的な分析を通して、十四会系準拠集団の有力メンバーであった住友や三井の経営者の理念と行動のみならず、日本の商社活動の担い手たちのそれをも明らかにすることにあるからである。そのためここでは日清貿易研究所そのものの安易な歴史的叙述の反復は回避されるはずである。

2) 同上，84頁。

3) 小山一郎『東亜先覚荒尾精』（東亜同文会，1938年）44頁。ただし大森，前掲稿より引用。大森は先に東洋学館の成立に言及している。『東亜同文書院大学史』（滬友会，昭和57年）23～24頁。なお同書は本稿では『大学史』として引用される。

4) 『大学史』23頁。大森，84頁。

## II 日清貿易研究所の成立

### (1) 政府補助金

荒尾精の尽力の結果、政府当局の同意の下に研究所が開設されることになったが、第一の問題はそのための資金の捻出であった。

同研究所の設立は「日清貿易不振」を打開するためのものでもあったから、事は「商務」に属し、時の農商務相岩村通俊及び前田正名（次官）は荒尾の企画に賛同し、その実現に尽力した。しかし岩村と前田が立てた資金調達計画は岩村と前田の辞職その他で中絶する。『対支回顧録』の下巻によると、けっきょく荒尾は軍人として先輩にあたる川上操六（当時、参謀次長）に泣き付き、助力を嘆願した結果、内閣機密費 4 万円が、調査費としてであろうか、支給されるにいたった。

大森氏のいうように、のちに研究所の卒業生の多くが、日清戦争のさいに川上の要請により、諜報員や通訳として従軍するにいたるの<sup>1)</sup>は、おそらく、この設立資金をめぐる川上のコミットメントを第一の要因とする。荒尾の盟友花田仲之助と同郷（薩摩藩）の川上は日清戦争の作戦指導者として知られる。

### (2) 遊説（石川県）

日清貿易研究所の開設が決定したので、荒尾らは約 1 年間、全国を遊説し、約 300 名の応募者を集め、そのうちから 150 名を選抜した。その大半は私費生であり、公費生は石川・福岡両県の県・郡費生 10 余名のみであった。ここで石川・福岡両県のみが公費生を出しえたことについてはいくつかの要因が考えられるのであるが、とくに石川県は 9 名もの県費留学生を出しているし、またいわゆる「十四会系準抛集団」の有力メンバーの多くが石川県出身者である<sup>2)</sup>ので、ここでは石川県の場合をとりあげてその経緯と背景を考えることにしたい。

1) 大森、前掲稿、84頁。

2) 「十四会系準抛集団」については次の拙稿を参照。拙稿「早川千吉郎の理念と行動」（同志社大学人文科学研究所編『財閥の比較史的研究』124～147頁）125～129頁。

明治22年に荒尾が石川県へやって来て、日清貿易研究所設立の計画を説いたさい、これにもっとも共鳴したのは**飯田秀魁**を中心とするグループであった。事実、当時県会議員をつとめていた飯田は金沢遊説中の荒尾と会い、「東亜の形勢を論じて大に共鳴する所」があり、「県費を以て貿易研究所に留学生を送ること」を約束した。そして県会において「激烈なる反対」があったにもかかわらず、あくまでも県費留学生派遣の原案に「固執」し、ついに9名の留学生を送るにいたった。<sup>3)</sup>なお、金沢藩士飯田庄平の長男である飯田秀魁は少壮時、加賀盈進社に大きくコミットしていた。そして盈進社の創立者である①遠藤秀景や②広瀬千磨などと深交があった。

① **遠藤秀景**は、明治10年に西南の役が起きたさい、(のちに大久保利通暗殺団のリーダーとなる)島田一郎らが挙兵して西郷軍にコミットしようとしたが、これに反対しこれを制止した。しかしまもなく「北陸に於ける不平鬱勃の士」を糾合して「盈進社」を創り、その社長となる。<sup>4)</sup>なお島田一郎と深交のあった飯田秀魁がこれに参加するのは明治14年のことである。

また遠藤秀景は明治22年に県会議員となり県会議長をつとめた。さらに第1回衆議院議員選挙に出馬し当選した。「平素對外硬の主張を有し、北陸壮士の巨頭として威名を天下に轟かしたが同志後進の東亜問題に努力する者を出すこと尠くなかった」<sup>5)</sup>といわれる。

のちに東亜同文書院の院長となる杉浦重剛の愛弟子の古島一雄によると、明治22年に新聞『日本』が創刊され、主筆陸実の文名が揚るとともに、日本新聞社は条約反対論者の集会所の如きものとなり、ここに「石川の盈進社」の連中が、「熊本の国憲党」や「福岡の玄洋社」の連中とともに出入りし、杉浦重剛、小村寿太郎、河上謹一ら「乾坤社」の連中や不平將軍(三浦梧村、島尾小弥太、谷干城ら)とともに「談論風発、慷慨悲憤」したといわれる。なおこの「集会所」はやがて「日本クラブ」(牛込五軒町)と発展し、盈進社

3) 『東亜先覚志士記伝』下巻、列伝(昭和11年)44～45頁。

4) 同書、581頁。

5) 同、44頁、581頁。

の遠藤秀景が、玄洋社の頭山満や枢密顧問官の佐々木父子らとともによく出入りしたらしい<sup>6)</sup>。

ここで想起されるのは、既述の如く、荒尾の呼びかけに呼応して石川・福岡両県が公費生を日清貿易研究所に送ることを決定していることである。当時「九州の玄洋社」と「北陸の盈進社」は「国粹主義」や「復古主義」でよく知られていた。なおかれらと直接的にも間接的にも関係があった杉浦重剛を中心とする乾坤社系の人々については別稿で詳述した<sup>7)</sup>。ここでは第1回衆議院議員選挙に出馬した遠藤秀景に呼応するかの如く、滋賀県からは、杉浦重剛（第1区）や住友の伊庭貞剛（第3区）らが出馬し、当選している点に注目しておきたい。とくに伊庭貞剛は、住友と十四会系準拠集団をつなぐ役割を果たした鈴木馬左也とともに、杉浦の盟友としても、財閥経営者としても重要な人物である<sup>8)</sup>。

マージナル・マンとしての遠藤秀景は積極的に企業者活動の展開を試みたことでも注目されよう。即ち「旧藩主に要請して士族授産金を得、起業社なるものを設立して北海道で開墾事業を起し、或は千島で漁業を始める等大に奔走する所」<sup>9)</sup>（傍点、瀬岡）があったといわれる。しかし松方デフレのあおりを受けた石川県士族には没落する者が多く、いわゆる「士族芸者」が金沢名物になったほどで、遠藤の諸活動も多くは失敗に終わった。

② 広瀬千磨もまた、遠藤秀景と同様、金沢の不平士族が西南の役で西郷軍に加担するのに反対したひとりである。金沢藩士岡田助右衛門の三男として生まれ、のち同藩士広瀬仁次郎の養嗣となった。明治14年に既述の「起業社」や「盈進社」にコミットするに至るが、のち「四方を周遊」してコスモ

6) 古島一雄『一老政治家の回想』（中公文庫、昭和57年）23頁。古島は杉浦の家塾称好塾出身。

7) 拙稿「江州系企業者と準拠集団(-)」（『研究紀要』21号、27～82頁）66～80頁。なおその最も大きな特徴のひとつは、異常なまでに高いコスモポライトネス（例えば執拗に主張された海外進出論）である。

8) 拙稿「伊庭貞剛の研究」（『京都学園大学論集』第14巻第2号）17～57頁。

9) 『東亜先覚志士記伝』下巻、列伝、581頁。とくに、北海道岩内郡共和村字間田村の開墾事業が知られている。

ポライトネスを高め、玄洋社の頭山満や杉山茂丸と緊密な関係を形成した。また柴四朗、渡辺治、池辺吉太郎などとともに「大阪毎日新聞」の創刊にもコミットした。さらに後藤象二郎、佐々友房などとも深交があった。

なおまた金沢の盈進社と福岡の玄洋社との間の橋渡し役をした人物としては**関屋斧太郎**がいる。関屋は慶応元年に金沢に生まれ、長じて盈進社に入るが、やがて福岡に赴き、玄洋社の平岡浩太郎の知遇を得た。平岡は、明治17年に末広重恭、中江篤介、杉田定一らとともに上海に東洋学館を設立した。しかも平岡自身は、岸田吟香の上海楽善堂と同じく、商店舗（上海製靴店）を中国での活動の拠点としていた。関屋はこの上海製靴店で「支那問題の研究」に従った。<sup>10)</sup>

### （3）北溟会

盈進社の広瀬千磨の弟にあたる**橋爪武**は安政5年に岡田助右衛門の五男として生まれ、橋爪芳尾の養子となった。明治11年に島田一郎らの大久保利通暗殺計画にコミットしたことで捕われたが、明治21年に特赦により放免され、川村主一郎が経営する日本水産会社に入る。そして日清戦争のさいには第一師団酒保として旅順に赴いた。高島鞆之助、榎本武揚、長谷川準也などと深交があったが、<sup>11)</sup>橋爪がもっとも多くのエネルギーと時間を傾注したのは「北溟会」である。これは「対露関係を憂憤して強硬論を唱へ、教育家として日露問題を痛論するのは穩かならずとの非難ありしも敢然所見を発表して屈せず」と『東亜先覚志士記伝』に記された北条時敬（金沢出身、十四会系準拠集団のオピニオン・リーダー）<sup>12)</sup>が大きくコミットした組織として知られる。

北溟会には正田直一や桂正直などもコミットしたが、その機関誌的役割を果たした雑誌『北日本』に掲載された「東亜問題に関する意見」の多くは桂正直の執筆によるものといわれる。<sup>13)</sup>なおこの北溟会の影響力の大きさは例えば

10) 同書、717～718頁。741～742頁。

11) 同、74頁。

12) 同、104頁。前掲拙稿「早川千吉郎の理念と行動」125～126頁。北条時敬は西田幾多郎の師。

13) 『東亜先覚志士記伝』下巻、列伝、233～234頁。桂正直は杉山茂丸と深交があった。

**額村孝次**という一青年の生活史より推察できよう。額村は明治11年に金沢に生まれ金沢市馬場小学校を卒業後、煙草店に奉公するが、「金沢北溟会幹部の激励を受け日露必ず戦ふべきの日あるを期して十九歳にして露領浦潮に渡航し、有志の士と交り露国の国情調査に従った」が、26歳で歿した<sup>14)</sup>といわれる。ここで注目すべきことは、額村が日清貿易研究所や東亜同文書院に関係なくロシア領ウラジオストックに渡航していることである。なお、額村が卒業した小学校の近くには、小倉正恒（のち住友総理事）、早川千吉郎（のち三井銀行理事を経て満鉄社長）、井上友一（のち東京府知事）、清水澄（のち枢密院議員）、泉鏡花（作家）などを輩出した小学校があった<sup>15)</sup>。そして北条時敬の生家もすぐ近くにあった。これらの人々は、泉鏡花という特異な人物以外は、すべて十四会系準拠集団の成員である。かれらの出自は旧加賀藩出身という点で一致していた。かれらと前田家との緊密な関係は、とりもなおさず、十四会系準拠集団というものの存在を証明する事実のひとつである。例えば明治42年に、前田家久徴館の後身である明倫学館に入った河合良成（のち厚生大臣、小松製作所会長）は哲学者西田幾多郎（北条時敬の愛弟子）の四高教授時代の教え子だが、この準拠集団の実態を（けっして十分なものではないが、）次のように伝えている。

「だいたい、そのころの学館は前田侯爵家関係の一つの家塾であったとい  
ってよい。当時大久保の前田侯爵家を中心にして色々な人物が集っていて、  
河村監督（小倉正恒の義父、瀬岡）の外に小倉正恒（住友総理事）、織田小覚  
（漢学者）などという立派な人々が中心で、平沼騏一郎さん、清水澄さんも  
関係があり、住友財閥とも関係があったらしく、また西田先生（西田幾多郎、  
瀬岡）などもこの一群の人々と相当の関係があったように思われる。<sup>16)</sup>」

そこでこのような前田家の家臣団を核とするグループ内から、例えば**中野**

14) 同書、773～774頁。

15) 拙稿「財閥経営者の準拠集団行動史」、『経済史・経営史論集』（昭和59年12月）559～563頁。

16) 詳細は拙稿「西田幾多郎と財閥経営者（Ⅰ）」（『京都学園大学論集』第12巻第2号、58～98頁）96～98頁。

常太郎の如き、荒尾精や根津一と少壮より深交があったとされる人物が輩出されるにいたるのは、本稿のパースペクティブにおいては、きわめて興味深いことである。中野の家は世々前田家の家臣であった。『東亜先覚志士記伝』と『対支回顧録』の双方にとりあげられているのは、荒尾や根津のみならず、<sup>17)</sup>のちに頭山満や河野広中とも深交があったからであろうか。

#### (4) 石川県・県費留学生

公費による日清貿易研究所への 9 名もの留学生の派遣が石川県において可能となった背景として、盈進社から北溟会へとつながる組織の流れがあったこと、そして十四会系準拠集団がその流れとけっして無関係ではなかったことが明らかになったので、次に留学生そのものをとりあげてみたい。

① 土井伊八 石川県出身の留学生のうちでももっとも注目すべき人物である土井伊八は石川県松任町の人で、慶応 3 年に出生。日清貿易研究所を卒業後、一生涯を上海に拠点をおく商社活動に終始した。本稿のパースペクティブにおいて注目すべきは、土井伊八が経営した上海羸華洋行という商社が「日清商品陳列所」（中国名は羸華広懋館又は羸華広懋公所）の後身であるという点である。

日清商品陳列所は日清貿易研究所の卒業生の実習機関として明治 26 年に設立されたものであるが、設立資金は大阪の企業家岡崎栄次郎が出したといわれる。<sup>18)</sup>上海税関付近に設置され、主に委託品の販売を行ったが、まもなく日清戦争が始まり、すべての保管をイギリス人に託して関係者は帰国した。土井伊八は戦後、イギリス人からこれを受けとり、色々と工夫をこらして新たに商取引を開始し、まもなくビジネスを軌道に乗せたため、そのすべては土井伊八に譲渡され、上海羸華洋行として、上海三井洋行とならぶ商社となった。<sup>19)</sup>なお日清商品陳列所は既述の如く荒尾精が当初企画していた「日清貿

17) 中野は明治 42 年に亜細亜義会を設立するさい頭山満の助力を得た。『東亜先覚志士記伝』下巻、列伝、351～352 頁。『対支回顧録』下巻、1405 頁。

18) 『対支回顧録』下巻、667 頁。

19) 『大学史』301 頁。『続対支回顧録』下巻（昭和 16 年）372 頁。大森前掲稿、85 頁。



易商会」の規模を縮小して出発させたものという説と、荒尾が新たに岡崎栄次郎を説いて、「日清貿易株式会社」というものを設立し、その付設機関として「商品陳列所」を設け、研究所卒業生の「実地練習」と「該貿易会社の取引媒介」を行い、将来、「両者相合し、渾然たる日清貿易の一大機関」とする予定であったという説がある。<sup>20)</sup>

前説は一般に認められているものであり、後説はかなり特異なものである。しかし、『統対支回顧録』の「列伝 田鍋安之助<sup>21)</sup>」のなかに、日清戦争終結後に京都の荒尾と会った田鍋は、荒尾が「京都在住の江州豪商と謀って江商合資会社を設立し、再び大陸に乗出さんとして奔走中」であることを知り、田鍋自身もこれに加わり、「社務を帯びて上京」し、同郷（福岡県）の頭山満に会い、「荒尾支援」のための「毎月数十金」の送付の謝意を伝達した、とあり、荒尾が一貫して貿易商社の設立にコミットしていたことが知られよう。<sup>22)</sup>なおのちに東亜同文会の幹部となる田鍋安之助は、十四会系準拠集團の成員と同じく、鎌倉円覚寺の今北洪川の高弟釈宗演の下に参禅し、「宿願の悟道」を得たあと、伊庭貞剛や愚庵天田五郎の法兄弟（天竜寺滴水宜牧の高弟）である橋本峨山の下に2年間参禅という「宗教的体験」を有する。<sup>23)</sup>また先にあげた中野常次郎は武田黙雷の弟子である。当時、黙雷は、釈宗演や峨山とともに、「天下の三老師」とよばれていた。この臨済宗ネットワークは「潜在的機能」（連帯性の維持と出会いの場の設定）において注目すべき点が多い。その「顕在的機能」とは、もちろん、「宗教的体験」である。（このことはこれまで筆者がくり返し主張してきた。）そして土井伊八もこのネットワークとけっして無関係ではなかったのである。土井伊八の羸華洋行はのちに、本店を上海に、支店を大阪に置き、出張所を漢口、青島、済南、天津、東京、横浜などに置くにいたる。

20) 『統対支回顧録』下巻、372頁。

21) 同書、268～319頁。とくに277～278頁。

22) 江商の設立には日清貿易研究所生であった藤井善助も大きくコミットしているが、それは後述するように、日露戦争後のことである。

23) 橋本峨山については、拙稿「江州系企業者と準拠集團(-)」69～71頁を参照。

② **金嶋文四郎** 金嶋は明治元年に旧加賀藩士の家に出生。日清貿易研究所では「受賞五回に及ぶと云ふ勉強家」で、卒業後は日清商品陳列所会計主任兼売買係に抜擢された。しかし日清戦争のため同所が閉鎖されたので、「大本営の特許」を得て兵站部に協力した。当時、研究所の卒業生の大半は「通訳官」として軍に徴集されたのだが、土井伊八や金嶋文四郎は商品陳列所の「継続維持」のために徴集されなかった。戦後、金嶋は陳列所副支配人をつとめるが、やがて大阪商船会社漢口支店新設にコミット、本社詰を経て、大阪商船大連支店の責任者となった。<sup>24)</sup>

ここで注目すべきことは、金嶋が大阪商船会社にコミットしはじめたころから、同郷の中橋徳五郎が同社の社長をつとめていることである。中橋は加賀藩士の家に生まれた。明治31年には逓信省鉄道局長のポストを捨てて大阪商船に入った。当然、十四会系準拠集団の有力メンバーのひとりとなる。<sup>25)</sup>

ところで大阪商船は早くから、住友人や十四会系準拠集団のメンバーと緊密な関係を形成していた。明治17年に設立されたさいの頭取は広瀬宰平であり、まもなく伊庭貞剛も取締役として経営にコミットしている。そして明治31年には、田中市兵衛の後任として中橋が社長となる。田中は中橋の岳父だが、中橋の後任として社長になるのは、金沢出身の堀啓次郎である。堀は大阪商船の中国進出につとめ、村田省蔵や林安繁を育てた。<sup>26)</sup>なお、中橋が犬養毅と戸水事件（明治38年）の戸水寛人（金沢出身、東大法科教授）の紹介で熊本出身の尾崎行昌を雇い入れた話はよく知られている。<sup>27)</sup>尾崎行昌は号堂尾崎行雄の末弟だが、明治30年代より宮崎滔天、内田良平、頭山満などとも深交があった。

24) 『東亜先覚志士記伝』下巻、列伝、237頁。『対支回顧録』下巻、642頁。

25) 『小倉正恒』(昭和40年) 68頁。294～295頁。565～566頁。

26) 同書、293～295頁。堀はのちに住友銀行の取締役として外部からは初めて名を連ねている。また、住友の中田錦吉と湯川寛吉に続いて小倉正恒も大阪商船の取締役として同社の経営にコミットしている。

27) 『東亜先覚志士記伝』下巻、列伝、774頁。

中橋は「一々会」(大正7年)の主催者床次竹二郎<sup>28)</sup>との関係においても重要となる人物である。(例えば大正末期、中橋と床次は政友本党を結成している。)

③ **那部武二** 明治元年に加賀大聖寺町に生まれた那部は金沢の第四高等学校に在学中、日清貿易研究所の開設を知り、これに入学する決意を固めた。研究所卒業後、同郷の土井伊八の羸華洋行を経て、金嶋と同じく大阪商船に入社した。さらにのちには南京三江師範学堂教習をつとめた<sup>29)</sup>。三江師範学堂では杉浦重剛の愛弟子菊池謙二郎や菅虎雄が教習をつとめたことがある。菊池は杉浦の東亜同文書院の院長に就任する前に教頭兼監督として送りこまれていた人物であり<sup>30)</sup>、菅は、今北洪川の下で十四会系の人々とともに禅の修業をしたあと、杉浦の東京英語学校につとめた人物である<sup>31)</sup>。ともに夏目漱石や正岡子規と深交があったことで知られる。

なお、菊池謙二郎の三江師範学堂入りには根津一が最初からコミットしていることを考えると、那部武二もまた根津の推挙により三江師範学堂につとめるにいたったのであろうか。(菊池が東亜同文書院につとめていた明治36年2月、両江総督張之洞が北京大学に対応しうる南方最大の学堂の創設を計画したさい、菊池は、根津一の推挙により、江蘇・江西・安徽三省学務の参議及び三江学堂総教習として南京に赴いたが、まもなく張之洞の武昌への転出により学堂建設計画が中絶となったという経緯があった<sup>32)</sup>、とのみ『東亜同文書院大学史』にはあるが、原武哲の既述その他と符号しないところがあり、調査中である。)

④ **小泉市太郎** 慶応2年に生まれた。大阪商船学校を中退して日清貿易

28) 「一々会」については、拙稿「住友の経営理念」(『日本思想史』14号、51～65頁) 58～59頁。

29) 『対支回顧録』下巻、637～638頁。『東亜先覚志士記伝』下巻、列伝、334～335頁。

30) 『大学史』261～262頁。元仙台二高の校長で、「今東湖」といわれた。

31) 原武哲『夏目漱石と菅虎雄』(昭和58年) 267～268頁。拙稿「財閥経営者の準拠集団」(『大阪大学経済学』第35巻第1号、31～63頁) 46～48頁。

32) 『大学史』261頁。

研究所に入り、日清戦争では「通訳官」として従軍した。有馬組勤務ののち飯塚松太郎と協同で鴻賓公司を設立、天津日本租界埋立工事を担当した。また牛家屯の道路開鑿工事を請負った。のち独力で加州組を起す。<sup>33)</sup>なお飯塚松太郎は岡山の人で、「荒尾精門下の一異才を以て目せられ、就中北支那及び満州に於ける土木界の雄と称せられた」人物である。小泉とは日清貿易研究所から有馬組へと、ともに進んでいる。飯塚工程局（鴻賓公司の後身）はとくに日露戦争中に急速に発展し、飯塚は「満州有数の土木業者」となった。また「北京順天時報」「奉天盛京時報」、大連外国語学校などの設立と運営にもコミットした。<sup>34)</sup>

⑤ 丹羽次吉 「日清貿易研究所出身者中の変り種」のひとりである丹羽は慶応2年、加賀国河北郡高松町に生まれた。日清戦争では通訳官として従軍、のち台湾法院に勤務した。その後、大倉組との樟脳製造の特許をめぐるコンフリクトや焼酎の醸造権をめぐるトラブルなどがあったが、執拗に種々のビジネス活動を追求しつつづけた。<sup>35)</sup>

⑥ 山岸浅吉 慶応元年に能登国珠洲郡木郎村に生まれた。明治20年石川県農学校卒業後、不動寺尋常小学校に勤務したが、志を立て日清貿易研究所に入り、明治26年に卒業した。通訳官として軍に従事すること2年ののち、「荒尾精の関係した樟脳製造事業」にコミットした。<sup>36)</sup>

⑦ 小槌芳 慶応3年能美郡小松町に生まれた。石川師範学校を経て日清貿易研究所に入り、のち通訳官として日清・日露の戦争に従軍した。明治38年、営口市街に平安組を起し、運輸・倉庫・輸出入などを行った。<sup>37)</sup>

33) 『対支回顧録』下巻、634頁。

34) 同書、628～629頁。飯塚松太郎は、奉天道路、長春駅、満鉄複線工事などを請負った。

35) 同書、643～644頁。『東亜先覚志士記伝』下巻、列伝、87～88頁。

36) 『対支回顧録』下巻、636頁。

37) 同書、同頁。

### III 供給源とリクルートメント

#### (1) 白岩竜平

前章ではとくに石川県出身者をとりあげたが、ここでは、日清貿易研究所を企業者や経営者の供給源というパースペクティブからとらえなおし、研究所を卒業したあと企業者活動を展開したり、ビジネスに従事した人々を企業者史的な枠組において剔出することとする。単なる人物史辞典ではない。

筆者の調査では、研究所は日清戦争のために短期間で閉鎖されてしまうのだが、にもかかわらず、何人もの革新的企業者がこの研究所において育てられた。その典型が、既述の石川県出身の土井伊八であり、土井と並ぶ存在としてよくとりあげられる白岩竜平である。白岩は明治3年、美作国英田郡讃甘村宮本に生まれた。明治18年に上京、「足掛け四年の涙ぐましき悲惨なる流浪生活」の後、銀座の書肆に丁稚奉公しているとき、新聞「日本」誌上で日清貿易研究所設立の<sup>1)</sup>ことを知り、荒尾精に直談判して入所許可を得た。とくに注目すべきことは、「日本」と乾坤社や十四会系準拠集団との関係であるがここでは、紙面の都合上、言及しない。<sup>2)</sup>なお、研究所生の多くがそうであったように、白岩の学資も備前の名望家野崎武吉郎が出した。白岩と同郷の先輩小松原英太郎の助言も得た。

白岩はのちに渋沢栄一の信頼を得て、日華実業協会に大きくコミットするにいたるが、研究所卒業後先ず着手したのは中国内河航運の開発事業であった。それは、明治29年に日清通商航海条約が締結され、清国でも洋商蘇杭滬通商試弁章程が制定公布されたからである。つまりそれは揚子江本流以外の内河の航運が白岩によりひとつの「企業者的機会」(*entrepreneurial opportunities*)としてとらえられるにいたったということを意味した。そして白岩の<sup>3)</sup>大東新利洋行は明治29年10月、上海—蘇州間航路80カイリの航行を開始した。

1) 『続対支回顧録』下巻、339～340頁。

2) 拙稿「江州系企業者と準拠集団(二)」62～63頁。

3) 『大学史』300頁。

この大東新利洋行は、白岩が、研究所時代から深交があった兆文藻を説き設立した「始めての日支合弁の汽船会社」であった。また資本金は10万円にすぎなかったが、株主として、近衛篤磨<sup>37</sup>、渋沢栄一、近藤廉平、野崎武吉郎などの錚々たる人士が名を連ねていたのは、白岩が日清貿易研究所の卒業生であったからであるし、白岩の「企業者の才能」(entrepreneurial talent)が早くから異彩を放っていたからでもある。

大東新利洋行は明治30年に上海—杭州航路150カイリを開始、翌31年に組織を変更して大東汽船会社となる。なおここでまた近衛篤磨らの支援があり、政府から国庫補助金が出ることとなった。<sup>4)</sup>のちの東亜同文会をめぐる近衛と白岩の連帯性はこのとき既に完成している。

大東汽船株式会社として株式組織に改組されるのは明治33年のことである。ここで蘇州—杭州航路は127カイリとなる。さらにその他の航路開発により、航路延長660カイリとなる。<sup>5)</sup>さらに白岩は新たに湖南汽船会社を創立する。そして同社は大東汽船とともに、明治40年に設立された日清汽船会社に合併された。白岩は同社専務取締役となる。<sup>6)</sup>社長は石渡邦之丞であった。

白岩は明治31年に近衛篤磨をリーダーとして結成された「同文会」に、宗方小太郎、井手三郎、中西正樹、大内暢三、佐々友房、五百木良三、岸田吟香、田鍋安之助らとともに参加した。これは、「東亜会」という杉浦重剛や陸実と関係が深い組織とともに、「東亜同文会」の前身として知られる。なお白岩はのちに東亜同文会の理事長に就任し、よくその責務を果たした。ちょうど牧野伸顕<sup>7)</sup>が会長をつとめていた時期である。

白岩が東亜同文会理事長としていかなる考えを有したかについては、例え

4) 同書、同頁。『続対支回顧録』下巻、342～343頁。

5) 湖南汽船の設立には、加藤正義、近藤廉平、桂太郎、小村寿太郎などの助力を得た。桂は当時首相、小村は杉浦の盟友だが、当時外相。同書、344頁。

6) 白岩は日清起業調査会や山本条太郎もコミットした東亜興業(株)にも大きくコミットしている。同書、349頁。

7) 会長牧野伸顕の後任は近衛文磨であり、理事長白岩竜平の後任は岡部長景。『大学史』59頁。白岩は大正11年2月から昭和11年12月まで理事長職をつとめた。

ば白岩自身の論稿「近衛霞山公の東方経綸に就いて」（『支那』第25巻第2・3号、昭和9年7月）や著者不明であるが「白岩竜平氏と支那問題」（『支那』第29巻第11号、昭和13年11月）などからある程度うかがい知ることができる。いずれにしても、日清貿易研究所時代より荒尾精をカリマス的に崇敬していたことは、約45年後に白岩が東亜同文会の理事長として東亜同文会の機関誌『支那』（特輯25周年記念号、第25巻第10号、昭和9年10月）に「荒尾東方斎先生の追憶」なる特集を組み、荒尾精にコミットした人々の荒尾に関する種々の論稿や追憶談を掲載していることから十分に知ることができよう。<sup>8)</sup>

なお、昭和9年9月7日には、「東方斎先生を偲ぶ」として霞山会館において荒尾精の追憶座談会が開かれた。白岩竜平や頭山満をはじめとして、土井伊八、三沢信一、神津助太郎などが出席している。<sup>9)</sup>

さらに「附録」として荒尾精の有名な「対清意見」と「対清弁妄」が掲載されている。ともに日清戦争後に公表され「空疎な老書生の理想論」として「各方面より大いに論難攻撃された」ものであった。<sup>10)</sup>それらは当時世間一般に広く認められていた「領土割取論」に真向から反対したものであった。荒尾は明治26年に帰国し、「東方通商協会」の設立その他に奔走したが失敗、京都若王子に退き、日清戦争には従軍せず、この「対清意見」「対清弁妄」を書いた。<sup>11)</sup>

## (2) リクルートメント

江州系企業者の藤井善助は『対支回顧録』や『東亜先覚志士記伝』では完全に無視されているが、本稿のパースペクティブにおいてはきわめて重要な人物である。ただしこの人物については別稿で詳述している<sup>12)</sup>ので、細い点は

8) 『東亜同文会機関誌主要刊行物総目次』（昭和60年）348～349頁。頭山満「巨人荒尾精を憶う」、田鍋安之助「漢口樂善堂時代の荒尾君」など。

9) 同書、349頁。『支那』第25巻第10号。

10) 『大学史』20～21頁。

11) 中絶した「日清貿易商会」との関係において興味深い。既述の如く、田鍋安之助の列伝では、「江商株式会社」となっている。

12) 拙稿「江商の企業者史的研究—藤井善助の社会化の過程—」『彦根論叢』第123号。

省く。興味深いのは、神崎郡北五個荘村宮荘に代々続いた近江商人の家に生まれた藤井が自発的に荒尾精の日清貿易研究所入学を決意し、上海へ渡ったことである。それは $\dot{\text{コ}}\dot{\text{ス}}\dot{\text{モ}}\dot{\text{ポ}}\dot{\text{ラ}}\dot{\text{イ}}\dot{\text{ト}}\dot{\text{ネ}}\dot{\text{ス}}$ を飛躍的に高めることによって新しい型の近江商人となるためのイニシエーションの如きものといえた。その回答が江商の設立である。さらに藤井を考える場合、政界への進出も重要なポイントである。

藤井は明治41年に衆議院議員に当選し政界に乗り出したが、この世界での準拠人は木堂犬養毅であった。犬養は金玉均や孫文との交流においてもよく知られている。のちに第6代の東亜同文書院長となる大内暢三なども藤井と同じく犬養を一生涯カリスマ的に崇敬した。

**大内暢三**は明治7年に福岡県八女郡白木村に生まれた。橘陰館中学から熊本英学校、東京専門学校を経て、コロンビア大学に留学し、学位を得て明治30年に帰国した。まもなく高田早苗の紹介で近衛篤麿を知り、深交を結んだ。

大内は近衛がコミットした同文会、東亜同文会、国民同盟会などの生成と発展において大きな役割を果たすが、明治37年1月の近衛の他界を契機として政界に乗り出してゆく。衆議院議員となるのは、藤井善助と同じく、明治41年のことである。それ以降、藤井と同じく木堂犬養毅が率いる憲政本党・立憲国民党・革新倶楽部に籍を置いて活動した。<sup>13)</sup>

本稿のパースペクティブにおいて注目すべきことは、先にとりあげた十四会系準拠集団の有力メンバーである**桜井一久**もまた明治41年に衆議院議員となり、やがて立憲国民党に入っていることである。桜井は「荒尾精などとも肝胆相照らす間柄」であった。<sup>14)</sup>なお明治43年の立憲国民党創立大会では「幹部選挙」が行なわれ、桜井一久は、藤井善助・片岡直温・福本誠・仙石貢・河野広中・島田三郎らとともに常議員に選出されている。<sup>15)</sup>

13) 『統対支回顧録』下巻、671～682頁。『大学史』255～256頁。

14) 『東亜先覚志士記伝』下巻、646～647頁。

15) 『藤井善助伝』（昭和7年）151～152頁。なお桜井一久は明治43年6月18日に他界した。



なお、桜井と藤井や大内との交流がここで途絶えるのは桜井がこの大会の直後に他界するからである。刎頸の交わりともいうべき友であった愚庵天田五郎は数年前に既に死んでいた。<sup>16)</sup> 桜井の妻は荒尾の盟友根津一の夫人の妹であったが、その根津は昭和2年まで生きのびた。<sup>17)</sup>

大内暢三が東亜同文書院長に就任するのは昭和6年12月である。その在任期間は約10年、その間に大内は特筆すべきいくつかのパフォーマンスをあげたが、ここでは靖亜神社の建立をとりあげておく。

『東亜同文書院大学史』によると、「靖亜神社の祭神は、近衛篤磨公・荒尾精・根津一の三先覚者を主神とし、大陸経綸の壮途半ばに散華した同窓の英霊を合祀せんとするもので、神社の建立は大内院長畢生の大事業として立案発足したものであった<sup>18)</sup>」とのことである。なお『支那』第26巻第12号(昭和10年12月)では、「靖亜神社建立記念号」として、大内暢三、水野梅暁、牧野伸顕、小幡西吉などの文章を掲載している。水野は東亜同文書院第1期生だが、住友の中国係といわれた金沢人太田外世雄(東亜同文書院第5期生)の準拠人である。牧野は当時、東亜同文会会長である。住友の鈴木馬左也と緊密であった。小幡は金沢人であり、住友の小倉正恒の竹馬の友であり、心友でもあった。<sup>20)</sup> 小倉正恒には別号に根津一に関する文章がある。<sup>21)</sup> 小倉は根津の義弟桜井一久の媒酌により桜井の心友河村善益の娘と結婚した。

このように東亜同文会関係者に十四会系準拠集団のメンバーが多いのは、ひとつには、東亜同文会の創設者近衛篤磨と前田家との緊密な関係によるも

16) 愚庵天田五郎は明治37年1月17日に他界。

17) 根津は大正3年3月、東亜同文会幹事長を、大正12年3月、東亜同文書院長を、夫々辞任して、伏見桃山に退いた。

18) 『大学史』143頁。

19) 大内暢三「靖亜神社の建立に際して」、水野梅暁「根津先生の遺像に題す」、牧野伸顕「靖亜神社の建立に献て」、小幡西吉「山洲根津先生を憶ふ」。(『東亜同文会機関誌主要刊行物目次』366頁。)

20) 松田江畔編『水野梅暁追懷録』(昭和49年)16～25頁。黒木晩石『秋月左都史』33～50頁、131～134頁、359～370頁。前掲拙稿「財閥経営者の準拠集団行動史」568～571頁。

21) 小倉正恒「酒豪根津先生の思ひ出」(『支那』第34巻第4号、昭和18年4月)

のである。とくに早川千吉郎、北条時敬、織田小覚などの十四会系準拠集團の有力メンバーが前田家の運営をめぐり近衛篤麿<sup>22)</sup>と深交を深めたことには注目しておく必要がある。この点は別稿で詳述した<sup>23)</sup>。

日清貿易研究所を出て実業界に入った人物は、白岩や藤井以外にもかなり存在する。たとえば、三沢信一・井口忠次郎・岡田普太郎・渡部正雄・河野久太郎・河本磯平・勝本恒喜・景山長治郎・吉原洋三郎・成田練之助・栗村顕三郎・向野堅一・三谷末次郎などの名をあげることができる。かれらはすべてかれらに固有のマージナリティを有した。

たとえば**成田練之助**は明治4年に鹿児島に生まれた。鹿児島造士館を経て東京に遊学、鎌倉円覚寺の今北洪川の下で禅の修業にはげんだ。既述の如く、同郷の先輩花田仲之助は今北洪川の愛弟子であり、荒尾精や根津一の盟友でもあった。のちに成田が日清貿易研究所を経て漢口樂善堂の同人となるのはこのためであろう。「日清役通訳」ののち横浜正金銀行、日清企業調査会を経て、東亜興業<sup>24)</sup>の経営にコミットする。なお、蒙古西藏地域の探検で知られる成田安輝はその兄である。兄弟ともにコスモポリタニズムが異常に高い。

白岩竜平の大東汽船の経営を助けた人物は上にあげた日清貿易研究所出身者のなかにも何人かいるが、とくに**河本磯平**は、本稿のパスpekティブにおいてもきわめて重要である。河本は白岩と同郷の岡山の出身で、白岩の義父となる西薇山（備前閑谷巒長）に学んだあと日清貿易研究所に入り、「日清役通訳」を経て大東汽船会社に入り、上海支店長をつとめた。また「日清英学堂」を創設し、牧放浪や香月梅外などを招いて子弟の要請を企てた。さらに「東亜時報」を創刊するとともに印刷所をも経営するなど、多方面に活動

22) 日本倶楽部を媒体とする早川と近衛の関係も重要である。なお近衛篤麿は明治18年旧加賀藩主前田慶郷の女衍子と結婚した。長子文麿は昭和11年より終戦まで東亜同文会会長をつとめる。当時の理事長職は岡部長景を経て昭和14年に金沢人阿部信行が引き受けている。

23) 前掲拙稿「早川千吉郎の理念と行動」127～131頁。

24) 『東亜先覚志士記伝』下巻、列伝、336頁。

<sup>25)</sup>した。なおここで牧放浪とはのちに「大阪朝日」の上海特派員として活躍する牧卷次郎のことである。明治17年に閑谷巒に入り、西薇山に教えを受けた。明治31年に上海へ渡り、上述の「東亜時報」に入社している。その中国論はきわめてユニークで質の高いものであったといわれる。のちに近衛篤磨とも<sup>26)</sup>関係を結ぶ。また同郷の白岩竜平、犬養毅、平沼騏一郎、大原孫三郎などとも深交があった。とくに木堂犬養毅の孫文へのアプローチが牧卷次郎に与えた影響は大きい。また平沼騏一郎は、既述の如く、十四会系準拠集団の有力メンバーであったので、牧はこの平沼を媒介者として住友の鈴木に接近し、その助力を得ることもあった。<sup>27)</sup>平沼は皇典講究所、国本社・修養団・無窮会・東洋文化研究所などに大きくコミットした。その伝記的回顧録を編纂した住友の小倉正恒は、平沼は津山藩の「流風遺俗」を受けて「崛起」したものである、と明記している。<sup>28)</sup>

薇山西穀一の門下生で日清貿易研究所に学んだ者は意外に多いと思われる。例えば、「日清戦役軍探殉難」として『東亜先覚志士記伝』に紹介され、『対支回顧録』でもとりあげられている**高見武夫**や**福原林平**もそうである。高見は閑谷巒で西薇山に学んだのち上京した。そして十四会系準拠集団の精神的原基をつくった鎌倉円覚寺に参禅し、ここで荒尾精との出会いを果たした。また福原は荒尾が遊説先の閑谷巒において明らかにした「研究所設立計画」に共鳴し、荒尾に従ったといわれる。その背景にはおそらく上海楽善堂と漢口楽善堂をめぐる荒尾精と岸田吟香（津山藩儒昌谷清溪の弟子）との緊密な関係がある。「日清交流の先覚者」として『東亜同文書院大学史』においても大きくとりあげられている岸田吟香は美作国久米郡埤和村の出身である。吟香は革新的企業家であるとともに、第一級の知識人であり、林圀書頭、藤田東湖、藤沢東咳、藤森天山、ヘボンなどとの交流で知られる。

25) 河本磯平は明治32年に自殺している。同書、222頁。

26) 『対支回顧録』下巻、856頁、『東亜先覚志士記伝』下巻、列伝、519～520頁。

27) 後藤孝夫『辛亥革命から満州事変へ—大阪朝日新聞と近代中国—』（みすず書房、1987年）70～74頁。

28) 『平沼騏一郎回顧録』（昭和30年）「はしがき」1～2頁。

福岡県久留米出身の岡田兼次郎もまた白岩竜平の大東汽船会社の経営にコミットしている。岡田は京都同志社で英語を修得後、日清貿易研究所に入学した逸脱者である。もっとも研究所の正規の「学科」<sup>29)</sup>には、清話学・商業地理・支那商業史・簿記学・和漢文学・作文・商業算・経済学・法律学・習字・商務実習・柔術体操と並んで「英語学」があり、しかもかなり重視されていたし、またイギリス人が教官をつとめていたので、岡田としてもそれほど違和感は持たずにすんだであろう。岡田は研究所卒業後、「日清役通訳」<sup>30)</sup>その他を経て、明治34年に大東汽船会社上海支店長となるが、まもなく他界する。その後任は渡辺正雄である。渡辺は明治6年に長崎県の島原に生まれた。藤井善助と同様、荒尾が研究所設立計画を抱いて遊説に來たさい、これに共鳴し、長崎中学を退学して研究所に入った。<sup>31)</sup>のち「日清役通訳」を経て大東汽船に入った。上海支店長在任数年にして病を得て帰国したのち、すぐれてマージナルな生活を送った。<sup>32)</sup>

#### IV 研究所の担い手たち

##### (1) 教職員

日清貿易研究所の教職員のなかには、東亜同文会や東亜同文書院との関係においても注目すべき人物が何人か見られる。ここでは①御幡雅文、②木下賢良、③宗方小太郎、④小山秋作、⑤西村梅四郎、⑥益田三郎をとりあげておく。

① 御幡雅文 安政6年4月、長崎に生まれた。外国語学校卒業後、外務省留学生として北京に赴き中国語と中国の事情を研究した。明治15年に帰国して熊本鎮台で中国語を教えるが、ここで荒尾精を知り、その後の生活史の

29) 『大学史』30～31頁。「英語学」は会話・作文・書取が中心で週6時間、「清話学」は会話口授が主体で週12時間。その他はすべて3時間以下。(ただし柔術体操と商務実習は例外。)

30) 『東亜先覚志士記伝』下巻、列伝、180頁。

31) 藤井善助は京都市立第一商業学校を退学して日清貿易研究所入りを果した。

32) 同書、207頁。『対支回顧録』下巻、626～628頁。晩年はキリスト教の牧師となる。

方向が決定される。明治31年より三井物産上海支店に勤務、山本条太郎の下で三井の支那修業生の監督となり、森恪・児玉貞雄・高木陸郎らを育てるとともに、東亜同文書院での教育にも大きくコミットした。御幡は日清貿易研究所から東亜同文書院へと一貫して「新人材の育成」に尽力したことで知られる。<sup>1)</sup> 著書に『台湾土語読本』『商売問答』『滬語便商』などがある。<sup>2)</sup>

② **木下賢良** 木下は館山藩士の家において安政4年に生まれた。明治13年に参謀本部第一回海外留学生としてウラジオストックに渡航し、ロシア語を修得した。またシベリア各地を徹底的に調査し、シベリア地図を作成した。数年後に帰国し、深交のあった荒尾精と『経世新報』の創刊や日清貿易研究所の設立にコミットした。研究所では主に地理学を教えた。木下は若くして二松学舎の塾頭をつとめるなど、漢学にもきわめて明るいコスモポリタンであったから、研究所生への影響は甚大であったろう。のち大連で天興公司を設立して、企業者活動を展開した。<sup>3)</sup> ③～⑥は簡単に紹介しておく。

③ **宗方小太郎** 肥後宇土藩の出身。研究所第1班幹事。いわゆる「済々黉グループ」の一員、荒尾の漢口樂善堂にも大きくコミット。<sup>4)</sup> 『漢報』発行者。

④ **小山秋作** 越後長岡藩の出身。(父小山良運は医師であったが、維新時に河井継之助と行動を共にした。) 陸軍軍人として、先輩の荒尾と根津に協力、研究所と陳列所の経営に大きくコミット。研究所第2班幹事。のち南洋起業株式会社、<sup>5)</sup> 南亜公司などの経営にもコミットした。

⑤ **西村忠四郎** 肥前神崎郡蓮池村出身。陸軍軍人として小山秋作とともに、創始期の研究所の経営にコミット。<sup>6)</sup> 第3班幹事。

1) 同書、134～135頁。

2) 『大学史』263頁。

3) 『東亜先覚志士伝』下巻、列伝、653頁。『対支回顧録』下巻、597～598頁。

4) 詳細は大森、前掲稿、78～79頁を参照。準拠人佐々友房は山県内閣から引き出した補助金で東亜同文会を設立。

5) 『対支回顧録』下巻、592～596頁。小山秋作の妻みつゑは児玉淳一郎の長女、佐々木高行の孫。杉浦重剛との関係に注目。

6) 同書、596頁～597頁。小山とともに川上操六参謀次長の命で研究所に入る。

⑥ **益田三郎** 福岡藩重臣の家に出生。16歳のときすでに「民権自由」を唱え、加賀に赴き、遠藤秀景主宰の盈進社に入る。日清貿易研究所の幹事をつとめたあと、「革命援助」や金山経営にコミット<sup>7)</sup>。遠藤秀景を知る福岡藩出身者として、本稿のバースペクティブにおいては注目すべき人物。『東亜先覚志士記伝』にも『対支回顧録』にもとりあげられている。

既述のように、研究所と同時に設立される予定であった日清貿易商会の職員としては、遠山景直・中西正樹・高橋道・井深彦三郎・平川常義・中島真一らの名があげられている。のちに同文会・東亜同文会にコミットするにいたる人物が多い<sup>8)</sup>。

## (2) 猪飼麻次郎

研究所は開設時より種々の障害につき当たった。運営資金枯渇、熱病大流行、学生の動揺などである。このため研究所は明治23年末から24年2月にかけて騒擾化していった。その結果、30名の退学者が出るとともに、研究所の改革がなされるにいたった。当時長崎商業学校の校長をつとめていた猪飼麻次郎が教頭に起用されたのもそのためである<sup>9)</sup>。

**猪飼麻次郎**は安政元年に豊前中津町に生まれた。いわゆる福沢山脈につながる人物であるが、本稿のバースペクティブにおいては、もっとも重要な人物である。慶応義塾出身。妻は中津紡績会社の山口半三の妹。『対支回顧録』には、「日清貿易研究所出身者の王事に奔走して撓まざる所以のもの荒尾、根津の感化に因るのは勿論であるが、猪飼教頭の薫陶の力も亦その功大なるものがあつた<sup>10)</sup>」とある。注目すべきことに、この猪飼は明治26年6月より29年7月まで滋賀県商業学校の校長をつとめたあと三井人となる。

7) 同書、599～600頁。松島雄之進と福島県の荒地の開墾にも従事した。

8) 『大学史』31頁。大森、78～79頁。

9) 同書、32頁。

10) 『対支回顧録』下巻、598頁。

## V むすびにかえて

日清貿易研究所教頭の猪飼麻次郎がのちに八商として知られるにいたる滋賀県商業学校の校長として起用されたことの背景についてはここでは詳しく言及しない。

同校は明治18年に創立され、当初は順調に発展してゆくように思われた。杉浦重剛は「江州商人に檄す」（明治19年3月28日）において、次のように記している。同校からの「新近江商人」の供給への期待は甚大であった。

「（上略）斯異国までも出稼ぎに行きて矢張以前の如く江州商人の地位を保ち、先祖の風を拡張して日章の旗を万里の海外に翻すに到っては、江州商人の名は日光と共に輝くべし。今や滋賀県に於て商業学校の設立あり。我輩は江州商人が之を利用して遂に我輩の望に副はん事を期するなり。」<sup>1)</sup>

要するに猪飼は「新近江商人」の輩出を最大目標とする商業学校の校長として最も適格と判断され、採用されたのである。とくに同校は明治25年を「頂点」として「廃校問題」でゆれうごいたが、猪飼が校長として赴任すると、ようやく落ち着き、「八商の基礎」が固まり始めた、といわれる。<sup>2)</sup>

明治26年6月12日、猪飼は新任挨拶に代えて、「支那内地の商業」と題して講演した。<sup>3)</sup> また明治28年5月19日には、「記念式及第十二回卒業式」に荒尾精が、前田正名とともに招かれ、同校のため「一場の演説」を試みた。<sup>4)</sup> なお明治28年12月7日には同校の「常集会」（尚商会本部）において猪飼による「我新版図台湾に設立されんとする江商合資会社」に関する「各種報告」があった、とのことだが、詳細は不明である。ただこれが既述の荒尾精の「江商合資会社」の設立計画<sup>6)</sup>と時期的に符合することは注目してよい。この点は別

- 
- 1) 『杉浦重剛全集』第2巻、24頁。
  - 2) 『八幡商業五十五年史』（昭和16年）216頁。
  - 3) 『八幡商業学校年表』（昭和16年）丙、8頁。
  - 4) 『八幡商業五十五年史』386頁。
  - 5) 『八幡商業学校年表』丙、10頁。
  - 6) 『続対支回顧録』下巻、278頁。

稿で詳述したい。

猪飼はこれより半年後、三井人（のち三井銀行京都支店長）として、実業界に転出する。猪飼は中上川彦次郎と同じ中津の出身で、慶応義塾では中上川の後輩であった。この点も別稿で論じることとする。

「企業者の供給源」としては、本稿でとりあげた日清貿易研究所の後身といわれる東亜同文書院や猪飼麻次郎がコミットした八商や御幡雅文が山本条太郎の下でコミットした三井の修業生制度こそ重要なものといえよう。これらについては稿を改めて論じたい。もちろん十四会系準拠集団の成員たちの多くがこれらの組織や制度の生成と発展のプロセスにおいて、注目すべき相互作用を展開しながら登場するはずである。（完）

〔付記〕 本稿において註記のない人物の略歴や略伝は次の文献を参考にした。

- ① 『人事興信録』（人事興信所，明治36年より，各年版）
- ② 『日本人名大事典』全7巻（平凡社，昭和12年，6巻，復刻7巻，昭和54年）
- ③ 戦前期官僚制研究会編 秦郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』（東京大学出版会，昭和56年）
- ④ 日本近代史研究会編『日本陸海軍の制度・組織・人事』（同上，昭和46年）

---

7) 日本経営史研究所編『中上川彦次郎伝記資料』（昭和44年）40頁，57～59頁。なお本稿では，紙面の都合上，猪飼麻次郎と山本条太郎や中上川彦次郎ら三井人との関係や，八商の商議員をつとめる住友の伊庭貞剛，西川重威（伊庭とともに西川吉輔の弟子）などとの関係は言及できなかった。なお日清貿易研究所は，異常に短い期間機能したにすぎないのであるから，企業者の供給源とはいえない，という意見もある。その影響力の異常な大きさに着目するならば，企業者活動供給の「原基」と考えることも可能である。それは例えば本稿でとりあげた土井伊八の上海羸華洋行に明治34年に入社した堀新という企業家（のち，大阪商船㈱専務取締役，日清汽船㈱取締役社長）の生活歴を分析することで明らかになるはずである。